

# 春秋繁露通解並びに義証通読稿十三一下

卷十一—王道通三第四十四・天容第四十五・天弁在人第四十六・陰陽位第四十七—

近 藤 則 之

## 序

本稿は『春秋繁露』の通解を、蘇輿の『義証』を通読し、その説に基づきながら試みたものである。今回は卷十一の後半部、王道通三第四十四・天容第四十五・天弁在人第四十六・陰陽位第四十七の四篇について行つた。本稿においても、従来と同じように、本文と注をそれぞれ分離して、通読、通解を行い、注の本来の位置を①・②・③……の記号で示す形式を取っている。また、従来同様、( )は蘇輿の自注を示し、( )は、訳者注を示す。

底本は、宣統庚戌本『春秋繁露義証』(中文出版社印行本)である。

## 王道通三第四十四①

### 〈義証〉

①凌云ふ、『説文通論』(書名未詳)に、『王は、天の明に則り、地の義に因り、人の情に通じ、一以て之を貫く。故に文に于いて三を貫きて王と為す。王は、中に居る、皇極の道なり。三は天地人なり』

と。

### 〈本文〉

古の文を造る者、①三画して其の中を連ねて之を王と謂ふ。三画は天地と人となり。而して其の中を連ぬるは、其の道を通づるなり。②天地と人との中を取りて以て貫を為して参つながら之に通づるは、王者に非れば孰か能く是れに当たらんや。③是の故に王者は唯だ天の施にして、④其の時に法(もと)「施」に作る。注によつて改める)りて之を成す(この下二字を脱す)。⑤其の命に法りて之を諸人に循はしむ。⑥其の数に法りて以て事を起こし、其の道に法りて以て治を出す(もと)「治其道而以出法」に作る。注によつて「法其道而以出治」に改める。⑦其の志に法(もと)「治」に作る。注によつて改める)りて之を仁に帰す。⑧仁の美は天に在り。天は仁なり。⑨天は万物を覆育して、既に化して之を生み、有た養ひて之を成す。⑩事功、已む無く、終はりて復た始まる。凡そ挙げて之に帰して以て人を奉ず。⑪天の意を察するに、窮極する無きの仁なり。人の命を天に受くるや、仁を天に取りて仁なり。

⑫ 是の故に（この下にもと「人之受命天之尊」の七字あり。虚説によつて衍とする）⑬ 父兄弟子の親有り。（「有」の字、もと無し。注によつて補う）忠信慈惠の心有り。礼義廉讓の行ひ有り。是非逆順の治有り。文理燦然として厚く、⑭ 知广大にして博きこと有り（もと「知广大而有博」に作る。虚説に従つて、「知广大而有博」に改め読む。蘇興、この句に誤字あるを指摘）。⑮ 唯道人道のみ以て天に參す可しと爲す。天は常に天下を愛利するを以て意と爲し、⑯ 一世を安樂にするを以て事と爲す。⑰ 好惡喜怒哀樂は皆其の用なり（「皆其」もと「而備」に作る。注によつて改める）。⑱ 然れば則ち「則」もと「而」に作る。注によつて改める。主の好惡喜怒哀樂は乃ち天の春夏秋冬なり。⑲ 其れ諸れ（もと「其俱」に作る。注によつて「其諸」に改める）暖清寒暑にして以て變化して功を成すなり。⑳ 天の此の四（四）もと「物」に作る。注によつて改める）を出すこと、時なれば則ち歳美にして、時ならざれば則ち歳惡し。㉑ 人主此の四者を出すこと義なれば則ち世治まり、不義なれば則ち世乱る。是の故に治世と美歳とは同数なり。乱世と惡歳とは同数なり。此を以て人の理の天道に副ふを見るなり。天に寒有り、暑有り。㉒（この下、各本、「土若地、義之至也」）「此皆天之近陽而遠陰」の文が連なる。蘇興本はこれを上篇陽尊陰卑第四十三に移す。また以下の『』の部分分は、もと上篇の文であり、蘇興がここに移したものの。

『夫れ喜怒哀樂の発と清暖寒暑とは其の實一貫なり。㉓ 喜氣は暖と爲りて春に当たり、怒氣は清と爲りて秋に当たり、樂氣は太陽と爲りて夏に当たり、哀氣は太陰と爲りて冬に当たる。四氣は天と人と同じく有する所なり。㉔ 人の能く蓄ふる所に非るなり。㉕ 故

に節す可きも止む可からざるなり。之を節して順に、之を止めて乱。人は天に生じて化を天に取る。喜氣は諸を春に取り、樂氣は諸を夏に取り、怒氣は諸を秋に取り、哀氣は諸を冬に取るは四氣の心なり。四肢の（もとここに「答」の字あり。注によつて取る）各々処る有るは四時の如し。㉖ 寒暑移す可からざるは肢体の若し。肢体其の処を移易する、之を天人（もと「王人」に作る。注によつて改める）と謂ふ。㉗ 寒暑其の処を移易する、之を敗歳と謂ふ。喜怒哀樂其の処を移易する、之を乱世と謂ふ。明王は喜を正して以て春に当たり、怒を正して以て秋に当たり、樂を正して以て夏に当たり、哀を正して以て冬に当たる。上下此に法りて以て天の道を取る。春氣は愛、秋氣は嚴、夏氣は樂、冬氣は哀、愛氣は以て物を生み、嚴氣は以て功を成し、樂氣は以て生を養ひ、哀氣は以て終はりに喪するは、天の志なり。㉘ 是の故に春暖かなるは天の愛して之を生ずる所以なり。秋氣清らかなるは、天の嚴にして之を成す所以なり。夏氣温かなるは天の樂しみて之を養ふ所以なり。冬氣寒きは天の哀しみて之を蔵する所以なり。春は生を主とし夏は養を主とし秋は収を主とし冬は蔵を主とす。㉙ 生は其の樂しみを灑して以て養ひ、死は其の哀しみを灑して以て蔵す。㉚ 為人子者也。（注、文の誤脱を指摘する。読まず。）㉛ 故に四時の行ひは父子の道なり。天地の志は君臣の義なり。陰陽の理は、聖人の法なり。㉜ 陰は刑氣なり。陽は徳氣なり。陰は秋に始まり、陽は春に始まる。春の言為る猶ほ僂僂のごときなり。㉝ 秋の言為る猶ほ湫湫なり。僂僂は喜樂の貌なり。湫湫は憂悲の状なり。㉞ 是の故に春は喜び夏は樂しみ秋は憂へ冬は悲しむ。死を悲しんで生を樂しみ、夏を以て春を養ひ、冬を以て秋を蔵するは大人の志なり。是の故に愛を先にして嚴を後にし、生

を樂しみて終はりを哀しむは、天の常（もと「当」に作る。注の或説によつて改める）なり。<sup>③⑤</sup>而して人は諸を天に資る。<sup>③⑥</sup>

天に固より此有り。然り而して無所之（注、三字誤有らんと。読まず）其の身の如きのみ。<sup>③⑦</sup>人主は生殺の位に立ち、天と共に變化の勢を持し、物、天化に応ぜざる莫し。<sup>③⑧</sup>天地の化は四時の如し。好む所の風出づれば則ち暖氣と為りて俗に生有り。惡む所の風出づれば則ち清氣と為りて俗に殺有り。喜は則ち暑氣と為りて養長有るなり。<sup>③⑨</sup>怒は則ち寒氣と為りて閉塞有るなり。人主は好惡喜怒を以て習俗を交じ、<sup>④①</sup>而して天は暖清寒暑を為して草木を化す。

喜怒時ありて当たれば則ち歳美に、時ならずして妄なれば、則ち歳惡し。天地と人主とは一なり。然れば則ち人主の好惡喜怒は乃ち天の暖清寒暑なり。審らかにせざる可からず。其の処にして出づるや、暑きに当たりて寒く、寒きに当たりて暑ければ、必ず惡歳を為す。

<sup>④①</sup>人主、喜びに当たりて怒り、怒りに当たりて喜べば、必ず乱世と為る。是の故に人主の太い守るところは蔵に謹みて内を禁ずるに在り。<sup>④②</sup>好惡喜怒をして必ず義に当たつて出すこと、暖清寒暑の必ず其の時に当たりて乃ち発するが如くならしむるなり。人主、此を掌にして失ふ無く、好惡喜怒（もとこの句の上に「乃」の字有り。注によつて衍とする）をして未だ嘗て差はしめざること、<sup>④③</sup>春秋冬夏の未だ嘗て過たざるが如くなれば、天に參ずと謂ふ可し。深く此の四者を蔵して妄りに発する勿きは、天と謂ふ可し。<sup>④④</sup>

#### 〈義証〉

①凌（曙）云ふ、『孝經援神契』に、『倉頡の文字は、統べて言を爲し、意を包ねて、以て事に名づくるなり。分かちて義を爲せば、則

ち文は祖父（「父」もと「文」に作る。原典によつて改める）なり。字は子孫なり。之を自然に得て、其の文理を備ふ。象形の属は則ち之を文と謂ふ」と。『法苑珠林』に、『書を造るには、凡そ三人有り。長の名を「梵」と曰ひ、其の書は右行す。次の名を「住盧」と曰ひ、其の書左行す。少者を「倉頡」と曰ひ、其の書は下行す』（典拠未詳）と。○『初學記』（卷九・『芸文類聚』十一に引いて並んで「古之人造文字者（古の人にして文字を作る者）」に作る。

②○『芸文類聚』十一に引いて、「連中者、通其道也（中を連ぬる者は、其の道に通ずるなり）」に作る。

③『尚書大伝』（卷六）に、「天地人の道備はりて、三五の運興る」と。『尸子』（卷上）に、「堯、舜に問ひて曰く、『何にか事ふ』と。

曰く、『天に事ふ』と。問ふ、『何にか任ずる』と。曰く、『地に任ず』と。問ふ、『何にか務むる』と。曰く、『人に務む』と。此れもまた王者天地人に參通するの義なり。蓋し上世の帝王初めて起ちて、皆道德學術を以て人に過ぐ。故に文を造ること此くの如し。秦漢以後にして、其の局一変す。○『說文』（一篇上）、「王」の下に、董仲舒を引いて曰く、「古の文を造る者、三画して其の中を連ねて之を王と謂ふ。三とは天地人なり。而して參つながら之に通づる者は王なり。孔子曰く、『一もて三を貫く王と爲す』と。『初學記』九、「取其天地与人之才而三通之、非王者其孰能若是乎（其の天地と人との才を取りて三つながら之に通ずるは、王者に非ずんば其れ孰か能く是くの若くならんや）」に作る。『芸文類聚』十一に「董子」を引いて、「取天地与人之才而參之、非王者其孰能当是乎（天地と人との才を取りて之に參ずるは、王者に非ずんば其れ孰か能く是れに当たらんや）」に作る。

④○天啓本、「是」の字無し。凌本同じ。

⑤疑ふらくは、二字を脱せしかと。「施」、疑ふらくは「法」に作りしかと。

⑥○盧（文昭）云ふ、「此の句の『而』の字は旧『如』に作る。亦、本通ず」（『春秋繁露校』、以下盧説はすべてこれによる。）と。

⑦疑ふらくは、当に「法其道而以出治」に作るべしと。

⑧「治」、疑ふらくは、「法」に作りしかと。天地陰陽篇（第八十一）に、「天は志は仁なり」と。

⑨本書餘序（第十七）に、「仁は天の心なり」と。○盧云ふ、「旧本『大仁也』に作る。又一本『夫仁也』に作る。皆誤れり」と。

⑩「有」「又」同じ。○『芸文類聚』十一、「故王者必法天、以大仁覆育万物、既化而生之、又養而成之（故に王者は必ず天に法り、大仁を以て万物を覆育し、既に化して之を生じ、又養ひて之を成す）」に作る。

⑪聖人は天を奉じ、天は人を奉ず。相參じ相互ひにして、以て事功を成し、凡そ一ら仁に本づくのみ。

⑫天の仁を取りて以て仁と為す。故に善を知るは性より生ず。

⑬盧云ふ、「七字疑ふらくは、衍か」と。『父兄』の上に、当に「有」の字有るべし」と。

⑭句ぎる。

⑮○盧云ふ、「本或いは『有而』をば倒す」と。官本に云ふ、「他本

『知』を『之』に作る」と。

⑯○官本に云ふ、「他本『意』を『義』に作る」と。

⑰○盧云ふ、「本或いは『一』の字を脱す」と。

⑱「而備」、疑ふらくは、当に「皆其」に作るべし。

⑲○「而」、疑ふらくは、「則」に作りしかと。「主」の下に各本「之」の字を脱す。今下文に拠りて補ふ。

⑳盧云ふ、「其俱」、疑ふらくは当に「其諸」に作るべし」と。○凌本、「俱」を「居」に作る。

㉑「物」、疑ふらくは「四」に作りしかと。

㉒○各本、此の下に、上篇の「土若地」より「此皆天之近陽而遠陰」に至るまでを接ぐ。張惠言云ふ、「当に『夫喜怒』より『而人資諸天』に至るまでに接いで一篇と為すべし」（典拠未詳と。今、凌本に従ひて移正す。然れども此の間、疑ふらくは、尚脱文有らんと。

㉓○盧云ふ、「一本『實』を『類』に作る」と。

㉔亦陰陽義篇（第四十九）に見ゆ。

㉕○官本に云ふ、「他本、『能』を『当』に作る」と。

㉖○官本に云ふ、「他本、『答』の字無し」と。典案ずるに、「答」の字無き、是なり。「各」の字形近きに因りて誤衍す。

㉗「王」、疑ふらくは、「天」の誤りならんと。「妖」と同じ。（『漢書』

五行志（中之上）に、「天は猶ほ天胎のごとし」と。『統志』（『後漢書』五行志一、注）に『洪範伝』を引いて曰く、「天は、敗胎なり」と。此に「天人」と云ふは、「敗歳」と對して正に合ふ。「天人」

を「佞邪」と為せば、此れと涉る無し。（『漢書』五行志（中之上）に、「貌の恭しからざれば、時には則ち下体生上の黜有り」と。所謂

る肢体移易なり。

㉘王者の喜怒哀楽の発は、即ち礼楽刑政の用なり。『中庸』の中和の效、之を天地位し万物育す（『中庸章句』第一章）に極むること、此を得て其の理を証すべし。

㉙○天啓本、「冬は歳を主とす」の句、「秋は収を主とす」の上に在

り。凌本同じ。

③⑩ 俞(槌)云ふ、「漑」は読んで「既」と為す。尽なり」(『春秋繁露平議』二)と。與案するに、「漑」は、其の氣を沾濡するを謂ふ。即ち沈澁の義なり。『史記』司馬相如伝に、「澎湃沈漑す」と。索隱に、「漑」一に「澁」に作る」と、是なり。

③⑪ 文、脱誤有り。

③⑫ 〇各本、「行」を「比」に誤り、「道」の下に「也」の字無く、「理」の上に「之」の字無く、「人」の上に「聖」の字無く、誤つて読む可からず。今、『御覽』十七の引に従ひて補正す。

③⑬ 『白虎通』五行篇に、「春の言為る、倂倂として動くなり」と。「倂」通ず。『御覽』十九、此の文の注を引いて云ふ、「音、轟。又癡準の反」と。四百六十七に引いて直ちに「轟」に作る。『礼(記)』郷飲に、「春の言為る轟なり」と。『風俗通』祀典篇に、「春とは轟なり。轟轟として揺動するなり」と。

③⑭ 『礼(記)』郷飲酒に、「秋の言為る愁なり」と。鄭注に、「愁」は読んで「摯」と為す。『摯』は「斂」なり」と。此に拠れば、則ち憂悲は正に「愁」の義なり。必ずしも字を改めず。『御覽』、『書伝』を引いて云ふ、「秋」とは悲なり。万物愁へて入るなり」と。〇『文選』西京賦注に此の四語を引いて、「春之為言猶倂也。倂者喜樂之貌也。秋之為言猶湫也。湫者悲憂之狀也(春の言為る猶は倂のごときなり。倂は喜樂の貌なり。秋の言為る猶は湫なり。湫は憂悲の狀なり)」に作る。又云ふ、「倂」は充尹の切。『湫』は子由の切」と。

③⑮ 盧云ふ、「当」は、即ち下篇に所謂「時に当たる」なり。或るひと疑ふらくは、是れ「常」の字ならん」と。

③⑯ 〇「夫喜怒哀樂之發」より此に至るまで、各本陽尊陰卑篇に在

り。

③⑰ 「無所之」の三字、疑ふらくは誤り有らんと。「如其身」とは、天道は一に人身に同じきを言ふ。

③⑱ 『文選』宋玉の九弁に云ふ、「秋既に先に戒むるに白露を以てし、冬又之に申ぬるに嚴霜を以てす。恢台たる孟夏を取め、然して坎僚して沈蔵す」と。王逸注に、「刑罰刻峻にして、上に仁恩以て民を養ふ無し。夫れ天の四時を制するや、春は生じ夏は長ず。人君之に則りて、以て万物を養ふ。秋は殺し冬は蔵す。亦其の宜しきに順ひて刑罰を行ふ。故に君賢に臣忠にして、政、大中に合すれば、則ち品庶、事に安んじ、万物、豊茂す。上闇く下偽り、徳を用ひて殘虐なれば、則ち貞良害を被り、草木枯落す」と。案するに、宋の意、亦天化を以て治化に比す。又魏の丁儀の刑礼論に曰く、「天、象を垂れ、聖人之に則る。天の歳を為すや、春を先にして秋を後にす。君の治を為すや、礼を先にして刑を後にす。春は生長を以て徳と為し、秋は殺戮を以て功と為す。礼は教訓を以て美と為し、刑は威嚴を以て用と為す。故に先に生じて後に嚴なるは、天の歳を為すなり。先に教へて後に罰するは、君の治を為すなり。天は久遠なるを以て其の春冬を改めず。而して人や古今を以て其の礼刑を改むるを得んや」(典拠未詳)と。

③⑲ 〇凌本、「長」を「成」に作る。

④⑰ 〇官本に云ふ、「他本『俗習』に作る」と。

④⑱ 〇官本に云ふ、「他本『矣』を『也』に作る」と。

④⑲ 「内」は「納」と同じ。『謹蔵』とは、輕々しく発せざるを謂ふ。『禁内』とは、逆受せざるを謂ふ。

④⑳ 「乃」、疑ふらくは衍字ならんと。〇官本に云ふ、「他本『使』の

上に『而』の字有り」と。

④〇凌本、「天」を「大」に作る。

#### 〈本文通釈〉

古代の文字を創造した者は、三本の線を引き、その中心を連ねて王の意味とした。三本の線は天地と人とを意味している。そして中心を連ねたのは、その（天地人の）道を通じさせるということである。天地と人との中心を捉えて貫通することをなし、（天地人の）三者に通達することには、王者でなければ何人も当たることではできない。従って王者は（天に通じるものであるから）ひとえに天の恵み（による存在）であり、天の時に（自ら）法って完成し（脱字につき完成するものの内容は不明）、天の命に（自ら）法って人々にもそれに従わせ、天の運数に法って（王者としての）仕事をなし、天の道に法って治を実現し、天の志に法って（王者としての営みを）仁に帰結させるのである。

仁という麗しいものは天（のあり方）に存在する。天は仁（そのもの）である。天は万物を覆い育てるが、生々作用を起こして物を生むと、更にそれを養って成長させ、その仕業は尽きることなく、一段落してまた始まる。（天はその）すべてを仁に帰結させて人を助けるのである。（こうしたあり方を示す）天の意志を察するに、極まることなき仁である。人が天から命を受ける時、（命として）仁を天から受け取り（その結果人は）仁となるのである。

（人は天より受けた仁によって）父兄と子弟の間の親しみを持つこととなり、忠信や慈恵の心を持つこととなり、礼義や廉讓の行いをなすこととなり、是非や順逆の（判断を行う）政治を有すること

となり、（その結果）整然たる文化は燦然として（輝き）濃厚となり、人知は広大にして博くなった。

天は常に愛することと利益を与えることをその意志となし、養い長じさせることを仕事とするのであり、春夏秋冬はいずれも（そのための）手段である。（同様に）王者も常に天下を愛することと利益を与えることをその意志とし、一世を安楽にすることをその仕事とするのであり、好悪喜怒は（そのための）手段である。つまりは君主の喜怒哀楽は天の春夏秋冬に相当する。（天は、春夏秋冬によって）暖かくしたり涼しくしたり、寒くしたり暑くしたりして、変化させながら（生々の）働きを遂げる。

天が（春夏秋冬の）四つのものを出現させる場合、正しい時に従えば稔りもよくなり、正しい時に従わなければ稔りも悪い。（同様に）人主が（喜怒哀楽の）四つのものを現す場合、義に従っていれば世は治まり、義に従わなければ世は乱れる。従って、治世と豊年は同じ運数のものであり、乱世と凶年も同じ運数のものであることがわかる。このことから人間社会の道理は天道に沿うものであることがわかる。

（次の「天に寒有り、暑有り」の句は、以下に脱文が疑われるので敢えて訳さない。）

そもそも喜怒哀楽の発現と涼しさ暖かさ寒さ暑さとは、内実が一貫している。喜びの気は暖かさとなって春（の実現に）当たり、怒りの気は涼しさとなって秋（の実現）に当たり、楽しみの気は太陽となって夏（の実現）に当たり、哀しみの気は太陰となって冬（の実現）に当たる。この四つの気は、天と人が共有するものであり、人が（自ら）蓄えることのできるものではない。そこで（これらの気を）節することはできるが、押し止めることはできず、これを節

すれば順調となり、これを押し止めれば乱れる。

人は天によって生まれ、天によって成長変化（の糧を）受け取る。（具体的に言えば）喜びの気は春から受け取り、楽しみの気は夏から受け取り、怒りの気は秋から受け取り、哀しみの気は冬から受け取るのであるが、（従って、人の喜怒哀楽は）四つの気の（発現した）心なのである。（また人の身体についても同じことが言え、）四肢がそれぞれ（しかるべき身体の）位置をもっているのは、四季（がそれぞれ持ち場をもっているの）と同じことである。（他方）寒暑（の順序）が入れ替えられないのは、（人の）肢体が置き換えられないのと同じことである。肢体がその（あるべき）位置を移し替えたもの、それを妖人と言い、寒暑がその（巡る）位置を移し替えること、それを凶年と言い、喜怒がその（発現する）時所を移し替えること、それを乱世と言う。

明王はその喜びの心を正しくもって、（自然界の）春に（その意義を）当て、怒りの心を正しくもって、秋に（その意義を）当て、楽しみの心を正しくもって、夏に（その意義を）当て、哀しみの心を正しくもって、冬に（その意義を）当てる。（そして人が）上下ともに（この明王のあり方に）法り、そうして（人は）天の道を受け取るのである。

春の気は愛（を心とするもの）であり、秋の気は厳しさ（を心とするもの）であり、夏の気は楽しみ（を心とするもの）であり、冬の気は哀しみ（を心とするもの）である。（春の）愛の気は物を生じ、（秋の）厳の気は成長を遂げさせ、（夏の）楽しみの気は生まれた物を養い、（冬の）哀しみの気は死滅した物に喪を行うのであり、（これが）天の意志である。そういうわけで、春の気が暖かいのは、

天が（物を）愛してこれを生むためであり、秋の気が涼しいのは、天が厳しさによって成長を遂げさせるためであり、夏の気が暑いのは、天が楽しんで物を養うためであり、冬の気が寒いのは、天が哀しんで物を（死滅したものを地下に）収蔵するためである。

すなわち四時の巡りは、父子の道であり、天地の志は、君臣の義であり、陰陽の道理は、聖人の法である。陰は刑の気であり、陽は徳の気である。陰（の発現）は秋に始まり、陽（の発現）は春に始まる。春の語の意味は、蠢蠢（として動く）ということである。秋の語の意味は、愁愁（として哀しむ）ということである。蠢蠢というのは喜び楽しむ様子であり、愁愁というのは憂え悲しむ様子である。つまり、春は喜びということであり、夏は楽しみということであり、秋は憂いということであり、冬は哀しみということであるが、（そのような四季と四情との対応は）死を哀しみ生を楽しむ（という）ことが中心なのである。

夏において春（が生んだ物）を養い、冬において秋（が成長を遂げさせ死滅させた物）を収蔵すること（に示される天のあり方）は、（人間界の）大人の意志でもある。つまり、愛を優先し厳しさを重視せず、生を楽しんで死滅を悲しむことこそ、天の常であって、人はそのあり方を天から受け取るので（あり、大人はそのことを自らの意志とするので）ある。

人主は生殺与奪の位に立ち、天とともに（事物を）変化展開させる勢力を保ち、（その結果）万物は天の変化展開の作用に応じないものがないこととなる。天地の（万物を）変化展開させる作用は、四季の変化のごとくであり、（天地の物を）好む風気が起こると、（その風気が）暖気となって自然世界に生氣を生じさせ、嫌悪の風気が

起ること、(それが)涼気となって自然世界に殺氣を生じさせる。喜び(の風氣)の場合は、養育が生じ、怒り(の風氣)の場合は、(物の地下への)閉塞が起る。人主はその喜怒哀楽によって習俗を変化させるが、天は(以上に示したように、その喜怒哀楽の表現である)暖涼寒暑によって草木を変化させるのである。(天の)喜怒(寒暑)が季節に應じていれば豊年となり、季節に應じなければ凶年となる。(そもそも)天地人は一体である。そこで人主の好悪喜怒は天の暖涼寒暑(と一体)であり、喜怒哀楽の出すべき場所を明確にして出すのでなければならぬ。(天が)暑くすべきときに寒くし、寒くすべきときに暑くするならば、必ず凶年となる。(同様に)人主が喜ぶべきときに怒り、怒るべきときに喜べば、必ず乱世となる。そこで人主が大切に守るべきことは、(軽々しく喜怒哀楽を發出させず、心に)収蔵することに謹み、(喜怒哀楽の發出を誤らせる刺激の心への不当な)流入を禁ずることにあり、好悪喜怒が必ず義に当たって發出すること、(天の)暖涼寒暑が必ず季節に應じて發出するようにするのである。人主はこのことを掌中に大事に守って見失わうことなく、好悪喜怒(の發出)が一度も間違いないこと、春秋冬夏(の發出)が一度も間違いがないようにするならば、(人主は)天と一体であると言うことができる。この(喜怒哀楽の)四者を胸中深く守って妄りに發出しなければ、(人主は)天(そのもの)と言うことができる。

## 天容第四十五①

① 凌云ふ、『淮南子』(主術訓)に、『天道は玄黙にして容無く則無

し」と。與案するに、『天容』は亦本書符瑞(第十六)及び人副天數篇(第五十六)に見ゆ。

### 本文

天道、序有りて時あり、度有りて節し、変じて常有り、反して相奉ずる有り。① 微にして速きに至り、蹕にして精を致し、② 一にして積蓄し(もと「積蓄」の上に「少」の字有り。注、誤りを指摘。よつて衍字とする)、広くして実ち、虚にして盈つ。聖人は天を視て行ふ。③ 是の故に其の禁じて好悪喜怒の処を審らかにするや、④ 諸を天の其の時に非ずんば暖清寒暑を出さざるに合せんと欲するなり。⑤ 其告之以政令而化風之清微也。欲合諸天之顛倒其一而以成歲也。(以上の二句、注、誤字の存在を指摘する。敢えて読まず)⑥ 其の浅末華虚を差けて敦厚忠信を貴ぶや、⑦ 諸を天の默然として言はずして功德積成するに合せんと欲するなり。其の阿党偏私せずして汎愛兼利を美とするや、諸を天の物を成す所以の者、霜を少なくして露を多くするに合せんと欲するなり。其の内に自ら省みるに是を以てして外に顯はるや。⑧ 以て時あらざる可からず。人主に喜怒哀有り。以て時あらざる可からず。亦時を為す可く、時も亦義を為す。⑨ 喜怒、類を以て合するは、其の理一なり。故に義と不義とは時の類を合せるなり。⑩ 而して喜怒は乃ち寒暑の別気なり。

### 義証

① 春生ずと冬蔵すとは反す。然れども相資りて以て歳功を成す。○天啓本、「反」を「及」に作る。



②「蹕」、「連」と同じ。「説文」(二篇下)に「連なり」と。天道は超妙の如しと雖も、而も精理咸寓す。

③「一」は、陰陽両つながら起こらざるを謂ふ。「少」の字、疑ふらくは誤り有らんと。

④『黄氏日鈔』(卷五十六、説諸子二)、「視」を「祖」に作る。

⑤「禁」は、即ち上篇の「藏を謹み内るを禁ず」の義なり。

⑥官本に云ふ、「他本、之」の字無し」と。

⑦兩句並んで疑ふらくは誤字有らんと。

⑧「天啓本」、「浅末」を「満末」に作る。案ずるに、「末」疑ふらくは本「薄」に作りしならんと。

⑨下に脱文有り。

⑩数語疑ふらくは誤文有らんと。

⑪「不義」の二字は、疑ふらくは誤り有らんと。

#### 〈本文通釈〉

天の道は、秩序があつて時間に従い、法則性があつて節度を保ち、変化はするが、それは恒常性を有し、(作用と)反作用があるが、(作用と反作用は一つの目的に向かつて)助け合う。(その作用は)微妙でありながら、遠い彼方にまで及び、遠くに及ぶが、精緻を極め、(二つの作用が同時に働くことも、相對峙することもなく、常に)一面的でありつつ蓄積し、広範でしかも充実し、(実体は感覚を超えて)虚であるが、(その成果は)満ちあふれている。

聖人は天に見習つて振る舞う。そこでその(不当な刺激の流入を)禁じて好悪喜怒の(しかるべき発出)場所を明確にする様は、(その発出の仕方を)天がしかるべき時でなければ、暖涼寒暑を発出しな

いのと同じにせんとする。……(以下の二句、注の誤字の指摘により、敢えて訳さず)……(聖人は)浅薄、瑣末、華美、空虚を恥じて敦厚、忠信を大事にすること、天が黙然として物言わず、その功德が(自ずから)蓄積完成するのと同じにせんとする。党派に阿つたり私的関心に偏つたりせず、博く愛し利益を(衆人に)共有させることは、天が物の生育を完成させるのに、霜を少し降し、露を多く降らせるようにするのと同じにせんとする。内に内省し外に(自己を)示すこと、……(以下、「可亦為時、時亦為義」まで、脱文や誤字が認められ、原文が明確とならないので、敢えて訳さず)……(人の)喜怒(と天の春秋と)は類を同じくするものあり、(兩者の間に存する)道理は同じである。……(次の「義不義者、時之合類」の「不義」に誤字が認められ、原文が明らかにならないので、敢えて訳さず)……そして(天人は同類の存在であるから、人の)喜怒は(天の)寒暑の別氣(形体を変じた氣)である。

#### 天弁在人第四十六

##### 〈本文〉

難する者曰く、陰陽の会は、①一歳にして再遇す。②南方に遇する者は中夏を以てし、北方に遇する者は中冬を以てす。冬は物に喪するの氣なり。則ち是に会するは何ぞ。③金木水火の如きは、各々其の主る所を奉じて以て陰陽に従ひ、相与に力を一にして功を并す。其の実独り陰陽のみに非ざるなり。然り而して陰陽之に因りて以て起こり、其の主る所を助く。故に少陽は木に因りて起こり、春の生を助くるなり。太陽は火に因りて起こり、夏の養を助くるな

り。少陰は金に因りて起こり、秋の成を助くるなり。太陰は水に因りて起こり、冬の蔵を助くるなり。④ 陰は水と氣を并せて冬を合すと雖も、其の実同じからず。⑤ 故に水は独り喪有るのみにして陰は与らず。是を以て陰陽、中冬に会する者なれども、其の喪に非ざるなり。春は愛の志なり。夏は衆の志なり。秋は敵の志なり。冬は哀の志なり。故に愛すれども敵有り、衆しめども哀有るは、四時の則なり。喜怒の禍〔禍〕注、字の誤りを指摘、哀衆の義は、⑥ 独り人に在るのみならず、亦天に在り。而して春夏の陽、秋冬の陰は、独り天に在るのみならず、亦人に在り。人に春氣無くんば、何を以て博く愛して衆を容れんや。人に秋氣無くんば、何を以て敵を立てて功を成さんや。人に夏氣無くんば、何を以て養を盛んにして生を楽しまんや。人に冬氣無くんば、何を以て死を哀しみて喪に恤へんや。天に喜氣無くんば、亦何を以て暖かくして、春、生育せんや。天に怒氣無くんば、亦何を以て清しくして、冬〔秋の誤〕、殺就せんや。天に衆氣無くんば、亦何を以て陽を疏いて、夏、養長せんや。⑧ 天に哀氣無くんば、亦何を以て陰を激して、冬、閉蔵せんや。故に曰く、「天乃ち喜怒哀衆の行有りて、人も亦春秋冬夏の氣有り」とは、類を合するの謂ひなり。⑨ 匹夫は賤しと雖も、而も以て刑徳の用を見る可し。⑩ 是の故に陰陽の行は、歳をもと〔歳〕の字無し。注によつて補う。終ふるまでに六月、⑪ 遠近、度を同じくするも而も在る所は処を異にす。陰の行は、春は東方に居り、秋は西方に居り、夏は空右に居り、冬は空左に居り、夏は空下に居り、冬は空上に居り。此れ陰の常処なり。陽の行は、春は上に居り、冬は下に居り。此れ陽の常処なり。陰は歳を終ふるまで四移す。而して陽は常に実に居る。陽に親しみて陰を疏んじ、徳に任じて刑を

遠ざくるに非ずや。⑫ 天の志は、常に陰を空虚（もと「処」に作る。注によつて改める）に置き、⑬ 稍之を取りて以て助と為す。故に刑は徳の輔にして、陰は陽の助なり。陽は歳の主なり。天下の昆虫は陽に随ひて出入し、⑭ 天下の草木は陽に随ひて生落し、天下の三王は陽に随ひて改正し、⑮ 天下の尊卑は陽に随ひて位を序す。⑯ 幼き者は陽の少なき所に居り、老ふる者は陽の老ふる所に居り、貴き者は陽の盛んなる所に居り、賤しき者は陽の衰ふる所に居る。蔵とは、其の陽に当たるを得ざるを言ふ。陽に当たらざる者は臣子是なり。陽に当たる者は君父是なり。故に人主は南面し、陽を以て位と為すなり。⑰ 陽、貴くして、陰、賤しきは、天の制なり。⑱ 礼の右を尚ぶは、陰を尚ぶに非ざるなり。老陽を敬して成功を尊ぶなり。⑲

#### 〈義証〉

① 凌云ふ、『周礼』春官 占夢疏に、按ずるに、『堪輿』に、皇帝〔黄帝〕の誤、天老に事を問ふ。云ふ、『四月、陽、巳に立ち、亥に破れ、陰、未に立ち、癸に破る。是れ陽、陰を破り、陰、陽を破ると為す。故に四月に癸亥有るを陰陽の交会と為す。未だ亥を破らずと言ふは、即ち未だ丑と對せずして亥に近づくなり。交会は惟だ四月十月有るのみなり』と。

② 〇天啓本、下の「遇」の字を重ねず。凌本同じ。

③ 以下、難ずる者に答ふるの詞なり。

④ 凌云ふ、『史記』天官書 索隱に、『物理論』に、『北極は天の中にして、陽氣の北極なり。極南を太陽と爲し、極北を太陰と爲す。太陰には則ち光無く、太陽には則ち能く照らす。故に昏明寒暑の極

を為すなり」と。『月令章句』に「天の道、陰陽各々少太有り。是れ四時を生ずるなり。少陽、春を為し、太陽、夏を為し、少陰、秋を為し、太陰、冬を為す」と。

⑤陰陽五行は各々自づから功を為す。

⑥「禍」の字、疑ふらくは誤りならんと。

⑦愈云ふ、「就」、当に読んで「酋」と為すべし。〔史記〕魯世家に「考公酋」と。索隱、「系本」を引いて「就」に作る、是なり。『太玄』〔経〕玄文に、「直酋相救」と。〔晋〕范望注に、「酋」は殺なり」と。是れ「酋」と「殺」と同義なり（『春秋繁露平議』二）と。與案するに、「爾雅」釈詁（下）及び「方言」（典拠未詳）並んで云ふ、「就」は「終」なり」と。故に「殺」は命を就ふと為す。死は世を就ふと為す。本、「殺」と同義なり。改め読むを煩はさず。『淮南子』天文訓に、「夏日至れば、則ち陰、陽に乗ず。是を以て万物就りて死す。冬日至れば、則ち陽、陰に乗ず。是を以て万物仰ぎて生ず」と。凌本、「就殺」に作るは非なり。

⑧○盧云ふ、「疏」、俗に「疎」に作る。本或いは「辣」に作る者は誤れり」と。

⑨『管子』四時篇に、「刑徳は四時の合なり。刑徳、時に合すれば、則ち福生じ、詭へば、則ち禍生ず」と。案するに、宋明の学者、多く四時を以て喜怒哀楽を論ずるは、皆此に本づく。程子云ふ、「仁は便ち是れ一箇の木氣の象なり。惻隱の心は便ち是れ一箇の生物春底の氣象なり。羞惡の心は便ち是れ一箇の秋底の氣象なり。只一箇の去就断制底の氣象有るは、便ち是れ義なり」（『二程全書』卷三）と。之を四端に推せば皆然り。亦類を合するの義を取る。四時之副篇（第五十五）に、「王者の四政は四時の若し。類を通ずるなり」と。〔類

を通ず」とは猶ほ「類を合す」のごとし。

⑩喜怒哀楽は人人同じくする所にして、貴賤を分かつ。○凌本、「而」の字無し。

⑪「終」の下、疑ふらくは「歳」の字を脱せしならんと。下に云ふ、「陰陽、歳を終ふるまでに各々一たび出づ」と。

⑫音、余。

⑬「処」、当に「虚」に作るべし。○盧云ふ、「置」、旧本「直」に作る」と。

⑭凌云ふ、「乾鑿度」に、「万物は陽に随ひて出づ。故に上六は九五の之を拘繫し、之を維持せんことを欲す。明けし、陽の化を被りて陰之に随従すること」と。『礼記』（王制篇）に、「昆虫未だ蟄せず」と。鄭玄曰く、「昆」は明なり。明虫とは、陽にして生じ、陰にして蔵するなり」と。

⑮「三王」は王者の世を繼ぐを言ふ。正朔二にして改む。即ち所謂る三統なり。亦陽尊陰卑篇（第四十三）に見ゆ。

⑯『礼記』曲礼（上）に、「席何くに郷はんと請ひ、衽何くに趾せんと請ふ。席、東（南の誤）郷北郷なれば、西方を以て上と為し、東郷西郷なれば、南方を以て上と為す」と。鄭注に、「坐に郷を問ひ、臥に趾を問ふに、陰陽に因る。坐、陽に在れば則ち左を上にし、坐、陰に在れば則ち右を上にす」と。

⑰凌云ふ、「乾鑿度」に、「不易なる者は其の位なり。天は上に在り、地は下に在り。君は南面し、臣は北面す。父は坐し、子は伏す。此れ其の不易なり」と。

⑱○盧云ふ、「旧本」、「制」を「刑」に作る。誤れり」と。

⑲右を尚ぶは、殷の法に拠りて之を言ふ。伊尹は右相にして、仲虺

制に沿ふ。明、元の制を改めて左を尚び、今猶ほ之に循ひ、周の制に合ふ。

#### へ本文通釈

批判者が言う。陰陽の（地球上での）合は一年に二回ある。南方で会う場合は中夏において行われ、北方で会う場合は中冬において行われる。冬は（発生、生育を遂げた後、滅び枯れ、地下に收藏される）物への喪に服する氣（が満ちる時）である。（生々を行う陽が冬にここにあるというのであれば、喪の氣が満ちないのではないと考えられるが）この冬に（陰陽が）会うというのはどういふことか。

（答え）金木水火は（金は秋、木は春、水は冬、火は夏と、それぞれが司る季節（の作用）に働きかけつつ、陰陽に従い、（五行と陰陽とが）力を一にして成果を共にするのであり、（四季の働きを実現するのは）実際のところ陰陽だけというわけではない。他方、陰陽はこれ（らの五行）に依拠して生起し、その司る季節（働き）を助ける。つまり、少陽は木に依拠して生起し、春の生々（の作用）を助け、太陽は火に依拠して生起し、夏の養育（の作用）を助ける、少陰は金に依拠して生起し、秋の熟成（の作用）を助け、太陰は水に依拠して生起し、冬の收藏（の作用）を助ける。陰は水と氣を共にして冬に会同するけれども、実際のところ（陰と水は）同じものではない。つまり、水だけが喪（の要素）を持つのであり、陰はそれに關係しないのである。そこで陰陽が中冬に合をなしても、喪（との關係）はないのである。

春は（天の）愛の意志（の出現）であり、夏は（天の）樂しみの意志（の出現）であり、秋は（天の）厳しさの意志（の出現）であ

の左相に先ず。『礼（記）』祭義に、「建国の神位は、社稷を右にし、宗廟を左にす」と。鄭注に、「周は左を尚ぶ」と。『周礼』家人に、「昭穆を以て左右と為す」と。注に云ふ、「昭、左に居り、穆、右に居る」と。『礼（記）』（曲礼上）に、「君の乗車に乗るに、敢へて左を曠しせず」と。（春秋）成二年（公羊）伝に、「逢丑父、頃公に代はりて左に当たる」と。何注に、「升車は陽に象る。陽道は左を尚ぶ。故に人君、左に居り、臣、右に居る」と。是れ知る、周人は左を以て上と為し、『春秋』の時、尚然るを。魏の公子、車騎を従へて左を虚しくし、自ら侯生を迎ふ。則ち戦国も仍ほ時に左を尚ぶこと有り。『公羊』桓二年注に、「賈家、宗廟を右にするは、親に親しむを尚ぶなり。文家、社稷を右にするは、尊を尊ぶを尚ぶなり」と。右を尚ぶに拠りて説を為すなり。漢も亦右を尚ぶ。故に董、爾か云ふ。朱子云ふ、「漢初は、右丞相、左丞相の上に居り。是れ右を尊しと為すなり」（典拠未詳）と。輿、案するに、『漢書』諸侯王表に、「左官律を作る」と。顔注に、「漢、上古の法に依り、朝廷の列は、右を尊しと為す。故に諸侯に仕ふるを謂ひて左官と為す」と。『漢（書）』高帝紀に、「趙の臣、田叔・孟舒等十人を賢として、召見して与に語る。漢の廷臣、能く其の右に出づる者無し」と。顔注に、「古、右を以て尊しと為す」と。王尊、奏して、匡衡の浩賞の為に東郷の席を布くを効して、以て朝廷の爵秩の位を乱すと為す（『漢書』王尊伝）は、惟だ右を尚ぶ。故に東郷を上と為し、西郷を下と為すなり。（『漢書』匈奴伝に、「其の座、左を長じて北向す」と。顔注に、「古、左を尊しと為す。先王の礼なり。中国は右を尚びて夷狄は左を尚ぶ。所謂る礼失はれて諸を野に求むる者なり」と。顔、周の制に泥んで説を為し、前後矛盾す。唐の時は右を尚び、又漢の

り、冬は（天の）哀しみの意志（の出現）である。そこで愛するけれども厳しさが有り、楽しむけれども哀しみがあるというのが、四季の（示す天の）法則である。喜怒哀楽のことは、ただ人にだけあるというのではなく、天にもあるのである。他方、春夏の陽、秋冬の陰は、ただ天にだけあるというわけではなく、人にもあるのである。人に春の気がなければ、どうして博く愛して衆人に寛大でありえよう。人に秋の気がなければ、どうして厳密さを打ち立てて成功を実現できよう。人に夏の気がなければ、どうして身の養いを盛んにして生を樂しめよう。人に冬の気がなければ、どうして死を哀しみ、喪に心を痛めたりしよう。（他方）天に喜びの気がなければ、どうして暖かさが起こり、春となつて（物が）生育しよう。怒りの気がなければ、どうして涼しさが起こり、秋となつて（物が）死んだり終わつたりしよう。天に樂しみの気がなければ、どうして陽を開放して、夏が起つて（物が）養長しよう。天に哀しみの気がなければ、どうして陰を勵まして、冬が起つて（物が地下に）收藏されよう。つまり、「天に喜怒哀楽にもとづく行為があつて、人にも春夏秋冬の氣がある」と言われるものであり、（それは、天人が）類を同じくするものであるということなのである。（従つて）たとえ匹夫であつても、（喜怒哀楽は万人が有するものであるから、その発現である）徳刑の働きの（有すること）を見ることができよう。

ところで、陰陽の運行（の地上にある期間）は、一年を通じてそれぞれ六ヶ月である。（相互間の）距離は同じにたち、存在する場所を異にする。陰の運行は、春は東方にあり、秋は西方にあり、夏は、（働きの伴わない）空虚な右（の主補佐の地位）にあり、冬は空虚な左（の準補佐の地位）にあり、夏は（働きのない）空虚（な役

割）で地下にあり、冬は空虚（な役割）で地上にある。これが陰の常の在処である。陽の運行は、春は地上にあり、冬は地下にある。これが陽の常の在処である。陰は、一年を通じて四方に推移するが、陽は常に（働きの示す）実位にいる。（これは天が）陽に親しみ陰を疎んじ、徳に任じて刑を遠ざけるということに他なるまい。天の意志は、常に陰を空虚に置き、少しこれを利用して助けとする。そこで刑は徳の補佐であり、陰は陽の補助であり、陽こそ稔り実現の主体なのである。

天下の昆虫は、陽（の働きの推移）に従つて出入し、天下の草木は陽（の働きの推移）に従つて発芽し、枯れまた葉を落とす。天下の三王は陽に従つて正朔を改めたのであり、天下の尊卑は陽に従つて序列を定める。（すなわち）幼とは、陽の少ないところにいるのであり、老いた者は、陽の老いたところにいるのであり、尊貴の者は陽の盛んなところにいるのであり、卑賤の者は陽の衰えたところにいるのである。（また例えば）蔵（くら、おさめる）とは、陽に当たることができないことを言うが、陽に当たらない者は臣子がそれぞれあり、陽に当たる者は君父がそれぞれであり、このように概念も陽に従つて決定していゝる。そして人主が南面するというのも、陽をその位としているということであり、（このように）陽が貴く陰が賤しいのは天の定めである。礼においては、右を尊ぶが、（これは働きの示さないまでも、右に位置することのある）陰を尊ぶものではなく、（働きの終えつつある）老陽を敬つて（物事の）完成を大事にしやうとするものである。

## 陰陽位第四十七

### 〈本文〉

陽氣、始めて東北に出でて南行し、其の位に就くや、西転して北入し、其の休に藏するなり。陰氣、始めて東南に出でて北行し、亦其の位に就くや、西転して南入し、其の伏に屏くなり。① 是の故に陽は南方を以て位と爲し、北方を以て休と爲す。陰は北方を以て位と爲し、南方を以て伏と爲す。② 陽、其の位に至りて大いに暑熱す。陰、其の位に至りて大いに寒凍す。③ 陽、其の休に至りて化を地に入れ、陰、其の伏に至りて德を下に避く。是の故に夏出でて上に長じ、冬入りて下に化す者は陽なり。夏入りて虚地に下に入り、冬出でて虚位の上に守る者は陰なり。陽は実に出でて実に入り、陰は空に出でて空に入る。天の陽に任じ陰に任ぜず、德を好みて刑を好まざることは是くの如きなり。故に陰陽は歳を終ふるまでに各々一出す。

### 〈義証〉

①〇天啓本、「伏」を「服」に作る。

②〇『黄氏日鈔』（卷五十六、説諸子二）及び天啓本、「伏」を並んで「休」に作る。凌本、同じ。

③『白虎通』誅伐篇に、「夏至に陰始めて起り、大いに熱きは何ぞ。陰氣始めて起り、陽氣推して上る。故に大いに熱し。冬至に陽始めて起り、反って大いに寒きは何ぞ。陰氣推して上る。故に大いに寒し」と。『通典』、『魏台訪議』を引いて大同なり。（典拠未詳）

### 〈本文通釈〉

陽氣は、（二年の運行において）初めて東北（の方角で地上）に出ると、南向きに進み、その本位（真南）に到達すると、（次に）西に向きを転じて、（更に）北に向かつて（地下に）入り、休止（の位置）に身を隠す。陰氣は、初めて東南（の方角で地上）に出ると、北向きに進み、やはりその本位（真北）に到達すると、（次に）西に向きを転じ、（更に）南に向かつて（地下に）入り、伏藏（の位置に）退く。このような次第で、陽は南方を本位とし、北方を休止（の位置）とする。陰は北方を本位とし、南方を伏藏（の位置）とする。陽がその本位に至ると大いに温熱となり、陰がその本位に至ると大いに寒冷となる。（また）陽がその休止（の位置）に至ると、生々変化（の働き）を（も）地中に引き込み、（他方）陰がその伏藏に至ると、陽の（生々変化の）德を地下に避ける。すなわち、夏に地上に出でて（物を）成長させ、冬に地下にあって（なお物を）変化させるものは陽であり、夏に地下で働きのない場所にあつて（身の程をわきまへ）守り、冬に地上に出て、働きのない地位にあつて（身の程をわきまへ）守るの陰である。陽は働きのある場所に出て、働きのある場所に入る（地上でも地下でも働きの連続する）。陰は働きのない場所に出て、働きのない場所に入る（地上でも地下でも働きのない場所）。天が陽に任じ陰に任ぜず、德に任じて刑を好まないことこの通りである。かような次第で、陰陽は一年を通じてそれぞれ一度ずつ地上に出る（ことは出る）のである。

（本学教授）